

随想

「不易流行」のこと

岡山県立美術館 館長 鍵岡 正謹



本冊子の名が「不易」だと知り、反射的に芭蕉の「不易流行」説を思った。というのも、四月に岡山県立美術館長に就き、方針は如何と問われて美術館ルネサンス、岡山山文化ルネサンスと応えている。岡山山文化や美術のよき伝統を今日の文化や美術の見直し、今日の芸術文化に再生し展開する。それをルネサンスと呼んだが、別に日本語にすると「不易流行」ともいえる。

切にする精神で詩の不変性・普遍性を志向する理念であり、「流行」とはたえず変化・活動する生あるものの新しさを追求する理念である。このふたつを把握した真の芸術家を芭蕉は「笈の小文」で「西行の和歌に於ける、宗祇の連歌に於ける、雪舟の絵に於ける、利休が茶に於ける、その貫通する物は「一なり」といった。そうした芭蕉の不易流行を代表する発句が、かの余りにも有名な俳句である。

芭蕉亡きあと半世紀、蕪村は初めて蕪村の俳名を使ったのが右の発句である。「古今集」でのもうひとつの歌うたう「鶯」を一日中鳴かし、芭蕉の「古池」を「古庭」に見立て、不易流行の詩精神を受けつぐ。芭蕉といい、蕪村といい、とも

に詩精神といった。この二大俳人を現在に詩人として真に再生させたのは、津山市沼出身の安東次男である。戦後前衛詩や銅版家駒井哲郎との詩画集で知られる安東次男(私たちが後輩はアングと敬愛し呼んでいた)は、独創的な評論で、芭蕉と蕪村を日本の詩人として捉え直した。その究極が『芭蕉七部集評釈』で、世に蕉風三変というが、その不易と流行に働く詩心だけは、見失わないようにつとめた」とある。この精神が文化の創造的継承、すなわち不易流行だと思ふ。(福武文化振興財団 評議員)

芭蕉が蕉風俳諧を確立し、蕉門の弟子たちに不易流行論を説いたのは、元禄二(一六八九)年「おくのほそ道の旅を終えてからである」といわれる『去来抄』に「此年冬、初めて不易流行の教へを説き給へり。…不易を知らざれば基たちがたく、流行を知らざれば風新ならず」とある。土芳「三冊子」に「師の風雅に万代不易あり、一時の変化あり、支考『梟日記』に「我が翁の風雅における、ふたつもの「不易流行」をつばさにして天下独歩せる人ならんか」とある。芭蕉芸術の根基といえる「不易流行」説をめぐり多くの論があるが、私はストレートに聞いている。「不易」とは日本詩歌や芸術を大

紀貫之が「古今和歌集」仮名序に、やまと歌は人の心をたねとして、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、いひいだせるなり。花に鳴くうぐひす、水に住むかわづの声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。日本詩歌論の古典で、「鶯」と「蛙」は歌うたう由緒ある生きものの代表となった。芭蕉は「蛙」を詠み、古い「詩精神」を不易で受けつぎ、流行に「飛込む」のである。

教育振興財団設立20周年記念 教育・文化合同海外調査団 福武教育振興財団は、今年設立20周年を迎えます。これを記念して同じく設立10周年を迎える福武文化振興財団との合同海外視察団を企画いたしました。今回の調査団は当財団の森崎岩之助常任理事を総合団長とし、教育調査団は建部町教育委員会の竹内武夫氏を副団長として、従来継承して参りましたアジア地域の検証から離れ、「フィンランド」の学校・教育研究機関等を訪問し、OECD学習到達度調査第1位の背景にある教育システムおよび外国語教育の実態を視察調査することといたしました。また、文化視察団は同財団の高山雅之評議員を副団長として「フィンランド」の教育を理解する上で重要な自然・環境・歴史・建築・音楽などの文化事象等を視察研究する予定としています。日程は9月26日から10月2日までの7日間で、調査研究し帰国いたします。調査の成果は後日「海外教育事情調査報告書」として、岡山県下の学校園や教育関係機関に配布する予定です。(赤松)

編集後記

暑い日差しの中、蝉の鳴き声が聞こえていた夏から、さわやかな風が頬に触れ秋の訪れを感じさせる季節へと変わってききました。

◆本号では、両財団の主要事業であり、文化関係・教育関係の贈呈式の報告や、受賞者・助成対象者の方々を中心に寄稿をいただきました。その文章から、家庭教育・学校教育の重要性、郷土の伝統を守り伝える熱意など、一つ一つの活動が岡山県の教育と文化を支えていると感じられました。

◆本日(9月14日)開催されました文化発表会では、昨年度文化活動助成を受けた19の団体が、1年間の成果をステージあるいは展示で発表されます。それぞれの発表から、文化活動に対する強い思いを感じていただけるものと思います。

◆今後とも両財団は岡山県の教育・文化の振興発展の一助となるよう努力して参りますので、ご支援とご鞭撻の程よろしくお願ひ申し上げます。(野間)

◆今後の行事予定◆

第25回 教育講演会 第19回 教育研究発表会 日時/11月4日(土) 13時/予定 場所/ピュアリティまきび

不易

福武文化賞

福武文化奨励賞

財団法人福武文化振興財団は、7月11日、「平成18年度第7回福武文化賞・同奨励賞および第10回文化活動助成の贈呈式」を、岡山プラザホテルで行いました。

福武文化賞は、備前焼作家として古窯調査を行うとともに、大窯焼成の科学的データを収集し、古備前大窯の技術解明に心血を注

森 陶岳氏(備前焼作家) 高原 洋一氏(版画家) が受賞

岡本悦子氏(舞踊家)・榎木和敬氏(テノール歌手) 郷原漆器生産振興会・倉敷管弦楽団

ぐ森 陶岳氏と、日本を代表するシルクスクリーン版画家の一人であり、岡山県内で優れた作品を発表している高原洋一氏が受賞されました。

福武文化奨励賞は、舞踊家として市民参加型の公演活動を行っている岡本悦子氏、テノール歌手としてヨーロッパのオペラ劇場を拠点に活動し、有望な新進歌手として高い評価を受けている榎木和敬氏、郷原漆器の生産技術の普及活動・後継者育成活動に取り組んでいる郷原漆器生産振興会、「美しい音色とよいアンサンブル」で質の高い演奏を目指し、精力的に演奏活動を展開している倉敷管弦楽団が受賞されました。



福武文化賞・同奨励賞受賞者を囲んで来賓と財団関係者

同財団の福武総一郎理事長は、「これからの時代は経済が目的化するのではなく、文化が目的であることこそ大切であり、私たち市民の手で地域を個性のかつ魅力的にする活動そのものが地域を元

第25号 平成18年9月14日 (財)福武教育振興財団 (財)福武文化振興財団 〒700-0807 岡山市南方3-7-17 TEL.086-221-5254 FAX.086-232-3190 http://www.fukutake.or.jp/ 制作 (株)吉備人

文化活動助成は75件!

気付けることにつながるのではないかと思います。この度、受賞・助成を受けられた皆様には、これを契機に一層「活躍」を研鑽いただき、さらなる成果を上げられることを期待しています。」とあいさつし、受賞者一人ひとりに、表彰状と蛭田二郎氏の制作によるメダルと副賞目録を贈呈いたしました。

福武哲彦教育賞

谷口澄夫教育奨励賞

倉田 洋子氏・矢部 清吾氏・米谷 正造氏 井原ジュニア新体操クラブ・倉敷市立長尾小学校

福武教育振興財団は、7月18日、「平成18年度福武哲彦教育賞・谷口澄夫教育奨励賞および教育関係助成贈呈式」を、岡山市内のホテルで行いました。

福武哲彦教育賞は山陽学園大学の濱田栄夫氏と、アクティブライフ井原まなびめいと個人1団体に贈られました。

濱田氏は、県下の家庭教育の推進に中心的な役割を果たしていることが評価されました。

式典には受賞者や助成対象者、選考委員等関係者約160名が出席し、式典後の懇親会では、参加者が理事長を囲んで自己紹介や活動内容等について熱心に語る姿が見られ、有意義な情報交換が行われました。(野間)

濱田 栄夫氏 アクティブライフ井原まなびめいと

アクティブライフ井原まなびめいとは、市民の主體的な活動による生涯学習の体制を築いたことが評価されました。

また、谷口澄夫教育奨励賞は、井原市立西江原小学校の倉田洋子氏、岡山市立高島中学校の矢部清吾氏、川崎医療福祉大学・同大学院の米谷正造氏、井原ジュニア新体操クラブ、倉敷市立長尾小学校の3個人2団体に贈られました。



教育関係受賞者および助成を受けた方々と来賓・財団関係者

教育関係助成では、教育研究助成74件、英語研修助成4件、特定教育助成14件、個性的教育を推進する地区・校への助成6件、英語教育重点地区・校への助成6件が選ばれました。また、今年度から開始した学力・人間力育成推進事業への助成には2件が選ばれました。

式典にあたり、福武総一郎理事長は、「岡山県の特徴を生かした岡山の教育をさらに向上させ、未来を担う子どもたちの成長に少しでも役立つよう今後とも努力していきたい。」と述べるとともに、「受賞者と助成者に対して、激励の言葉をおくりました。(下山)

福武哲彦教育賞

生活が陶冶する

山陽学園大学 教授 濱田 栄夫



光栄ある福武哲彦教育賞受賞にあたり心から感謝申し上げます。このたび思いがけずも受賞させていただくことになりましたが、地域における家庭教育支援のためにご尽力いただききた多くの方々のご支援があったことと改めて感謝申し上げます。

現代社会において家庭教育支援の必要性が高まってきた背景には、この四十年間ほどの生活内容の激変によって、家庭や地域での生活それ自身が陶冶力を失いつつあることと関係していると思えます。こうした状況の中で子どもたちの心が育ちにくくなったとよく言われますが、今まで私たちは心や内面生活を伝え合うために、火や大地のイメージを習慣的によく使ってきました。例えば「心の火を消さない」「心を暖める」「情熱を燃やす」は火のイメージをもとにしていますし、「心に種をまく」「まかぬ種ははえぬ」「心に雑草をはえにくくする」などは大地のイメージからつくられています。そしてこのような表現は「火をおこすこと」

や「大地に伏して生きること」を日常的に繰り返す長い歴史の中からは生まれてきたのではないでしょう。か、落葉集めや薪割りなど火をおこすための準備を怠らない「火を消さないように番をする」「火の用心をする」「よい種を選ぶ」「土づくりをする」「草をはやさないようにする」などの共通イメージを誰もが普通にもつていたがために、心や内面生活を伝え合う上で、火や大地のイメージは極めて効果的だったと思えます。

ところがこの四十年間ほどの生活内容の急変によって「火をおこす」という言葉はすっかり非日常語になってしまいました。団塊世代ぐらいから上の世代の人たちは子ども時代の生活体験が身にしみ込んでいますから、日常語の感覚をもっている人が多いと思いますが、それ以下の世代の人たちにとってはほぼ完全に非日常語になっています。キャンプファイアなどのときだけの言葉です。

こうした言葉のイメージ変化は子育て文化が伝わりにくくなっていることと密接に関連しています。家庭教育支援は、子育て文化が伝わりにくくなっている現状への補完作用として行われるものですが、豊かで便利な時代は生活そのものが子どもたちにもたらす陶冶力をどのようにして回復させるかという問題に直面しているように思えます。かつてスイスの教育思想家ペスタロッチーは「生活が陶冶する」という命題を高く掲げました。教育が生活から離れることを危惧したのですが、現代ではそれだけでなく、生活そのものが陶冶力を失う危険性に直面していると言えます。

微力ではありますが、今後とも地域の問題に役立ちたいと願っています。どうぞよろしくお願い致します。



地域に根ざした映像をつくらう!

玉野ビデオ教材制作協議会 代表 大月 秀樹

社会科の地域学習場面で、子どもたちの「見学に行つて調べたいけど、遠くて行けない。でも、もう少し調べてみたいな。」という願いを少しでも支援できたらという思いで誕生したのが、玉野ビデオ教材制作協議会である。

この会は、小学校3、4年生向けのビデオ教材やマルチメディア教材(以下自作映像教材という)を制作する自主研修グループである。活動を開始したのが平成5年度からである。会のねらいは、教材の制作・提供を行い、子どもたちの情報活用能力を育てること、他に、もう2つある。

1つ目は、メンバー同士のふれあいである。放課後や休日、市民センターや小学校の一室に集まり「教材のねらいは?」「どうやって取材しようか?」「どんな教材を提供すれば子どもたちに役立つのか?」などと教材づくりの検討を行ったり、取材に出かけたりする。これらの活



制作・編集の様子



取材の様子

動を通して、教材研究はもちろん、ビデオ教材づくりなどの技法や手順、そして、先生たちのネットワークがつけられるのである。2つ目は、地域の人のふれあいである。取材を通してその仕事にかかわる人たちの願いや思いを直接聞くことができる。この経験はなにもものも代えがたく、私たちの貴重な宝物になっている。

14年目を迎える今年も、これまでの自作映像教材等をデジタルコンテンツ化することと自作映像教材を活用した地域学習を展開することを計画している。

最後に、今回福武教育振興財団の教育研究助成を受けることになり、心から感謝申し上げます。そして、今後も「細く、長く活動していこう!」をモットーに私たちの地域でしかつくれない自作映像教材を子どもたちのために提供していきたいと考えている。

福武文化奨励賞受賞に寄せて

「蒜山特産の郷原漆器復活」

郷原漆器生産振興会会長 岡山県郷土文化財団顧問

高山 雅之

平成元年から復活に取り組んできた蒜山特産の郷原漆器にとつて、今年には嬉しいことが続きました。3月には岡山県教育委員会から、民俗技術として県内初にして唯一の「岡山県指定重要無形民俗文化財」の指定を受け、7月には福武文化奨励賞受賞の栄に浴しました。

郷原漆器は主として普段使いのお椀や木皿などを作り続け、六百年の伝統を受け継いできましたが、昭和20年の終戦を境に生産が途絶えてしまいました。その郷原漆器復活を提唱されたのは長野士郎元岡山県知事でした。

昭和60年に復活の指示を受けた私は、郷原漆器や漆に関して、何の知識も持っていませんでした。郷原に何度も通つては、漆器作りの経験を持つ古老から、木地作りや漆塗りの技法をはじめ、暮らし向きのことなどを聞かせていただきました。その中で木地作りについて興味深い話を伺うことができました。

それが郷原漆器の最も大きな特徴といえる地元産のヤマグリ



「郷原漆器の館」2階の塗師部屋で塗り作業をする会員

の木を輪切りにして、年輪の芯を中心に生木のままで木地を挽き、後で乾燥させるといった技法でした。このような方法で、現在木地作りをしている産地は何処にもありません。

こうして作られたお椀などの木地には、外側にヤマグリの木特有の美しい木目が現れます。この木目を活かすために、漆の木から採取した生漆を、塗っては拭き取り、そして乾燥させる作業を数回繰り返して仕上げる「拭き漆」と呼ばれる技法を用いました。内側には底に麻布を

貼り、漆と砥の粉を練り合わせたもので下地をしてから、下塗り、中塗り、最後に朱漆または黒漆を塗って仕上げます。

平成元年に復活作業を開始して18年目を迎え、多くのご家庭で使つていただけるまでになりました。これは、郷土の伝統を守り伝えようと、郷原漆器生産振興会に参加された地元の方々のためめない努力と、ご指導くださったお三方のおかげです。輪島市の漆芸家角俣三郎氏と、千家十職の塗師第十二代中村宗哲氏(本名中村弘子氏)には、復活当初からご厚誼をいただき、漆に関する歴史や文化をはじめ、塗りの技までご教示いただきました。惜しくもお二人とも、平成17年秋に相次いで他界されたことが悔やまれます。

もうお一方は岡山県指定重要無形文化財保持者の漆芸家山口松太氏で、常に親しくご指導いただいております。

このたび郷原漆器生産振興会に賜った栄誉は、人の出会いの不思議なえにしに結ばれたもので、これは数百年にわたつて、郷原漆器を作り続けてこられた、先人のお導きによるものと思つております。このたびの受賞で、大きな励みをいただきましたことを感謝しております。

平成18年度

福武文化活動助成を受けて

大枝登紀子(芸名 朱鷺たたら)

横笛をご存知でしょうか。義経、敦盛、おつうさんとかればピンとくる方も多いでしょう。よく通る音色の竹笛です。笛は能や歌舞伎、各地のお囃子のなかで使われてきました。ほとんどが合奏であり、古典の独奏曲が1曲もないという現状を知ったときは驚き、途方に暮れる想いでした。それは楽器として独立した歴史がないということなのです。既存のジャンルへ属さない、ただの笛吹きになりたくとも曲も場もないなかで、ライブやストリートでの活動をはじめ、ジャズミュージシャンたちと触れ合い、即興、曲作りを学んできました。

横笛は世界中でみられます。モンゴルの笛吹き奏者と即興し



新見市「西来寺」でのコンサートで「桜」を演奏

たとき、彼の後ろに青い空と草原が広がるようだったのに対して、私は深い山林が見えるようだと言葉、またそう感じました。同じ作りの笛なのに見えてくる景色が違う面白さと思議さ。風土に培われてきたものののだなど直感する瞬間です。

高い可能性を秘めた横笛を楽器として独立させたいという思いで、作曲、曲集・教則本の執筆、後輩の指導に取り組んでいます。自身も探求の途上にあ

いますが、なにより生の音を聴いていただきたく、コンサートを開催しています。ぜひ一度、私たちの土からうまれてきたこの笛に耳を傾けて欲しい、様々な風土の多様性と美しさを音楽を通して思い出していたいだいたいと願っています。

最後になりましたが、ご支援くださいましたこと有り難く、心よりお礼申し上げます。